

日治末期菁英青年的閱讀生活： 以王萬居先生藏書為例

津田勤子

國立臺灣師範大學臺灣語文學系博士候選人

isoconet@ms24.hinet.net

摘 要

本論文討論王萬居先生藏書調查結果。王萬居先生 1925 年出生於台北市，是一位現年九十的醫師。從台北第二中學校畢業以後，1944 年進入台北高等學校高等科理乙班，1945 年 10 月因終戰提早畢業。1946 年 9 月進入台灣大學醫學院，1950 年畢業，自 1957 年至今在三峽從事地域醫療。台灣因屬於日本殖民地而被捲入世界大戰，日本統治結束後歸還中國，在新的執政者統領之下，社會體制面對極大的改變，這段歷史稱得上是台灣史上最大的動亂期，恰與王先生的就學期間完全疊合。

本研究前半段論述對王先生藏書進行調查的結果：他現在的藏書中，戰前在日本發行的日語書籍佔了泰半，共計 536 本。筆者一本一本記錄其書名、著者名、發行日期、價格、書上的筆記，並將這 536 本以五領域來分類。經過本次調查，整理了王先生藏書有如下五點特徵：（1）集中在人文學方面，（2）多半是歐美作品的翻譯書，（3）岩波書店的書籍佔率二成，（4）有可能在台北或日本的書店購入書籍，（5）書上有戰後大學時代閱讀的手寫紀錄，表示王先生戰後仍有旺盛的讀書欲。

後半段則透過有關台北高校生回憶錄等的資料，論述高等學校如何影響菁英青年形成讀書生活的「型」。透過日治末期菁英的閱讀生活，本文嘗試描述台灣如何累積知識，以及生活史、文化史的斷面。

關鍵字：菁英、台北高等學校、王萬居、閱讀、教養主義

日治末期エリート青年の読書生活： 王萬居氏の蔵書を例に

津田勤子

国立台湾師範大学台湾語文学系博士候選人

要 約

本論文は王萬居氏の蔵書調査の結果に基づいたものである。王萬居氏は1925（大正14）年台北市生まれ、現在90才の医師である。台北第二中学校を経て、1944年に台北高等学校高等科理乙クラスに入学。1945年10月、終戦の為同校を繰り上げ卒業する。翌1946年9月台湾大学医学院に入学、1950年同学卒業。1957年より現在に至るまで、三峡で医院を経営し、地域医療に従事している。彼の就学期は正に台湾が世界大戦に巻き込まれ、終戦後、中国への返還を経て、新しい執政者の下、言語をはじめとして社会体制が激変するという台湾最大の動乱期とぴったり重なる。

この論文の前半は、王氏の現在の書斎の大半を占める、戦前に日本で発行された日本語書籍536冊を1冊ずつ手に取り、書名、著者名、発行年月日、価格、本の中の書き込みを丁寧に写し取り、5つのカテゴリーに分類した調査記録に基づいて考察したものである。この蔵書調査から明らかになった5つの特徴——（1）人文学分野に集中、（2）欧米作品の翻訳書が大半、（3）岩波書店が全体の2割以上、（4）台北や内地の書店で入手した記録あり、（5）戦後も旺盛だった読書欲——についてそれぞれ詳しく述べる。後半では、高等学校がいかにエリート青年の読書生活の「型」形成に影響を与えたかを、台北高校卒業生の回想録等を元に論述する。ケーススタディを用いて日治末期エリートの読書生活を明らかにすることで、台湾の「知」の蓄積、生活史・文化史の一断面を描くことを試みる。

キーワード：エリート、台北高等学校、王萬居、読書、教養主義

一、はじめに

筆者は長期にわたり、日本統治時代末期に中・高等教育を受け、世界大戦、終戦、中国への復帰、二二八事件、白色テロ……台湾史上最大の動乱期を青年として過ごした世代の台湾人について研究をしている。中でも台北高等学校（以下、台北高校）の台湾人学生たちが1943年5月に創立した「杏」というグループに着目し、彼らが「台湾人の知識向上のために」行なった数々の活動や文芸作品についての分析を進めている¹。その杏会の掲げた目標は台湾人の「知識向上」だった（蔡、2011：495）のだが、ではその「知識」はどこから、どのような形で吸収されていったのだろうか？もちろん、学校での授業、社会や家庭での生活体験も、青年が知識を高める機会であっただろう。しかし、読書という行為で書物から得る知識も見逃してはならない。

近代教育を発展させる中、明治日本では高等教育制度が整い、国家の指導者やエリートを養成する目的で高等学校が創設された。高等学校に入学すると、原則的に帝国大学へは無試験で入ることができ、高等学校は大学の予備的機関として機能していた。後に大学で専門知識を得るための基礎となる語学力が、高等学校では大変重視され、また現在の大学の一般教養に相当するような科目が教えられ、いわゆるリベラル・アーツが実践された。また、机にかじりついて学科の勉強をするだけでなく、寮生活や部活動等を通し、将来人の上に立つ指導者的人物になるべく、豊かな人格を形成していくことが貴ばれた。そこで生徒たちの人格形成、幅広い知識の吸収の手段として、読書も大いに奨励されたのであった。読書、特に哲学・文学・歴史等の人文学の書を読むことによって人格を磨こうとする思想形態は当時「教養主義」²と呼ばれ、戦前日本中の高等学校に浸透していた。

台湾における唯一の旧制高校、台北高校³も決して例外ではなかった。卒業生の代表人物、前総統の李登輝氏は自身の学生生活が人格形成の上でいかに価値あるものであ

¹ 「杏」は週に1度の読書会の他、レコードコンサートや映画鑑賞等、文化的な活動を行なった台湾人青年のグループ。台北高校の他、台北第二中学や第三中学、第三高女の学生も後に参入。1943年5月創刊の文芸同人誌『杏』及びその従属雑誌『罌粟』『月来香』『白雲』の編集発行を、1948年1月頃まで続けた。これらは手書きの原稿用紙を綴じて作った「回覧雑誌」で、現存しているのは目下10冊のみ。俳句や短歌、小論文、創作、書評等、日本語によるさまざまな形態の作品が掲載されている。

² 明治時代の「修養主義」を経て確立されたこの思想は、「大正教養主義」と呼ばれる。

³ 日本には植民地・占領地を含めて38の高等学校があった（大学予科も含む）。台北高校は1922年台湾総督府高等学校としてまず尋常科（中学校に相当）が開設された。1928年の台北帝国大学へ入学することを見越し、1925年に高等科が開設された。

ったか語る際、読書生活の充実を述懐している（李、1999:40-41）。他にも、日本時代最年少で宜蘭郡守となった楊基銓、戦後台湾大学医学院の院長を務めた黄伯超、台湾語研究者王育徳等、多くの卒業生が台北高校生活と読書を密接に結びつけ回顧している。このような台北高校生の資質や学園生活については、既に徐聖凱が概況をまとめており、高校生活で読書がいかに大きな要素を占め、外国著作を中心に幅広い範囲で読書がなされたかを論証している（徐、2012）。

本論文は徐の基礎研究を踏まえ、日治末期に台北高校生として過ごし、戦後初期に大学生活を送ったエリート青年がいかに読書生活を送り、本の中の世界を自己形成や生きていく糧にしていたのか、を王萬居氏の蔵書調査という個案に基づき、より具体的に考証していく。ここでまず王氏の経歴を、社会状況とともに紹介しておく。

表一 王萬居氏の経歴

年月	経歴	社会状況
1925 (大正 14) 年	台北市大正町二条通り（現在の林森北路と新生北路の間、長安東路の右側）にて生まれる	莊垂勝らが「中央書局」を創設。台北高校高等科第一期生が入学
1932 (昭和 7) 年	日新公学校入学	台湾初のデパート菊元百貨店落成
1939 (昭和 14) 年	台北第二中学校入学	台湾総督が皇民化、工業化、南進基地化等 3 大政策を宣言
1944 (昭和 19) 年	台北高等学校高等科入学	8 月学徒勤労令公布
1945 (昭和 20) 年	3 月学徒兵召集、台湾第 13862 部隊として汐留等に駐屯。10 月台北高等学校繰り上げ卒業	4 月台湾にて全面的に徴兵制度実施。10 月 25 日をもって台湾省行政長官公署が正式に起動。11 月 15 日台北帝大接收完了、「国立台湾大学」に改組
1946 (民国 35) 年	9 月台湾大学医学院入学	「日産処理委員会」設立。台湾省編訳館成立。台湾省国語推行委員会成立
1950 (民国 39) 年	同学卒業、同学付設醫院医局勤務	呉三連が台北市長に。蒋介石が台湾で総統職権を回復。前年、台北高校廃校

年月	経歴	社会状況
1954 (民国 43) 年	三峡衛生所主任	中美共同防衛条約に署名。大專 聯考開始
1957 (民国 46) 年	三峡で文化醫院を開業、現在に 至る	前年、吳濁流「アジアの孤児」 が日本で出版

(出典：経歴については、王萬居 (2011)、王萬居・所澤潤 (2012)、黄信喜 (2012) 及び王氏
に対する筆者の質疑応答より。社会状況の部分は吳密察監修 (2000)、高明士主編 (2009)、徐
聖凱 (2012)、山口守編 (2003) より)



図一 王萬居氏自宅蔵書 (2013 年 8 月筆者撮影)



図二 台北高校時代の王氏 (提供：王萬居氏)

日本統治下の台湾人の読書生活については、莊勝全が公学校教師だった黄旺成の読書内容、読書方式について日記を元に分析している。1911年の時点で23歳だった黄は、伝統的漢文の素養を備え多くの漢文書籍を読んでいるが、その一方で歴史や法律、植物の専門書、トルストイ等文豪の長編小説等は日本語で読んでいる。莊は日記を手掛かりに黄がどのような空間で読書し、1か月の書籍代はいくらだったか、他人から借りた場合、誰に借りたか等詳細にわたり分析。黄の読書スタイルを「廣泛的閱讀(read “extensively”)」だと結論づけた。更に読書から何を得たかについて、情報への欲求を満たし、読書と議論を通じ、絶え間なく世界観を再構築し、プライベートだけでなく他人とのコネクションの手段にしていたことを導き出した(莊、2011)。個人の日記を元にしたケーススタディから、読書のスタイルや内容のみならず、読書を通じて得ようとしたことを考察した点は非常に意義深い。

更に時代を進めて日治末期の台湾人については、王恵珍の「戦前台湾知識分子閱讀私史 以台湾日語作家為中心」がある。日本内地では関東大震災以後、廉価な円本や文庫本の出現を通じ、読書が大衆化し、その日本で過剰に出版された書籍のはけ口として台湾に在庫書籍や古本、過去の雑誌が大量に出回ったという当時の出版状況に詳しく触れている。また、龍瑛宗や頼和、楊雲萍の蔵書、呂赫若の日記等を見ると彼等が改造社や文芸春秋社の発行した円本の全集を所有していたことがわかり、ここから植民地知識人の系統だった知識内容、文化装置が窺われると論述している。王は日本語訳の書籍を通じ、台湾知識人が世界の近代知識だけでなく、祖国中国の情勢をも知ろうとしたことを指摘した(王、2010)。本論文で研究対象とする日治末期青年よりやや上の世代に当たる作家たちが日本語書籍を読む一方で漢文書籍も読み、また日本語書籍を通して中国に対する知識を得ようとした点は注目に値する。

次に、王萬居氏と同世代の作家に目を向けると、葉石濤(1925年生まれ)や鍾肇政(1925年生まれ)が挙げられる。葉は回顧録の中でいとこたちが留学先の日本から持ち帰った日本語書籍を通して世界文学の面白さに目覚めたと語っている(葉、2008)。鍾も師範学校の同級生の影響でルソーの『懺悔』はじめ、ロシア文学の『罪と罰』、『復活』等に読みふけ、人生とは人間とは何かを思索したことを告白している(鍾、1998)。彼等のような1925年前後に生まれた世代は、その前の世代に比べ、更に徹底した日本語教育の中で皇民化教育を受け、漢文の素養に乏しく、日本語での読み書きや思考に慣らされていたため、戦後は北京語の習得はもちろん台湾語で話すことにすら違和感を感じた人も多い。この世代の特徴、苦境については、周婉窈(周、2003)や阮斐娜(阮、2010)の著作で詳しく述べられている。

二、蔵書実態調査の分析

(一) 5つのカテゴリーに分類

筆者は台北高校卒業生の活動や「杏」研究を通し、王氏と懇意になり、三峡の文化醫院内自宅の書斎にある蔵書を1冊ずつ手に取り、調査する機会をいただいた。調査は2013年8月から10月の約3か月間、合計6回にわたった。王氏の書斎には約700～800冊の蔵書があり、その中に536冊の戦前発行の日本語書籍があった⁴。筆者はこれら(536冊)を取り出し、(1)書名、(2)著者、翻訳者、編者名、(3)出版社名、(4)発行年月日と版数・刷数、(5)価格、(6)本の中の書き込み、の6項目に分けて記録。それを以下5つのカテゴリーに分類し、蔵書リストとしてまとめた⁵。

表二 5つのカテゴリー別の冊数及び割合

カテゴリー	冊数（全 536 冊）	割合
1 外国人著者の思想、哲学、歴史（評論・論文等）	25 冊	5%
2 日本人著者の思想、哲学、歴史（評論・論文等）	43 冊	8%
3 外国人著者の文学	252 冊	47%
4 日本人著者の文学	112 冊	21%
5 その他、芸術、心理学、自然科学分野	104 冊	19%

（出典：津田勤子「王萬居先生蔵書書単」）

もちろん、この冊数は王氏の読書量全てを表すものではない。王氏によれば、人に貸して返って来なかった本も多くあるし、自分で購入せず図書館で借りたり人に借りて読んだ本も多数ある。また、幾度の引越しや水害等で紛失してしまった蔵書もあるという。それにしても戦前日本で発行・出版された本（数冊台湾で発行されたもの有）を、いまだ500冊以上も保有してあるというのは驚嘆に値する。社会的には戦乱期、二二八事件、白色テロ等、王氏の個人生活では引越しや災害などを経た上で、この536冊が現在まで残存したことはどんな意味を持つのかは、今後改めて考えてみる必要が

⁴ 王氏の書斎には壁一面に4つの書棚が取り付けられており（図一）、そのうちの3つが日本語書籍で埋め尽くされている。その中から戦前発行のものだけ取り出し、調査対象とした。

⁵ 筆者作成「王萬居先生蔵書書単」2014年10月、未発表。表一～表六は全てこの資料を元に作成。分類項目については出版年代別等も考えられたが、本研究の目的は王氏がどんなジャンルのどんな著者の書物を読んだかを究明することなので、ジャンルと著者で大別することを試みた。ジャンルについては、教養主義の最も重要な要素、文学を主軸に据え、思想・哲学・歴史を1つにくくり、その他として自然科学・芸術・心理学等をまとめた。

あるだろう。

(二) 蔵書内容の考察

1. 人文学分野に集中

王氏の回顧によると、彼の読書欲が高まったのは高校生になってからのことという。中学では高等学校への受験準備で忙しく、読書どころではなかった。高校にさえ入学できれば、帝国大学への入学は申請だけで可能だったのだから、高校生が高校に入学したとたん読書に没頭したのもうなづける。それにしても、王氏は高校で理乙クラス⁶、大学で医学部に属し、今の言葉でいう「理系」学生だったにも関わらず、彼の蔵書の大半が人文系の哲学・文学の書物で占められていたのは驚きだった。自然科学の本はカテゴリー5に分類したが、『自然科学史入門』『高山植物分図彙』『植物形態学汎論』⁷他、計16冊しかなかった。またこのカテゴリー5には1～4に含みにくい書物を「その他」としてまとめ、社会科学系の読み物も含んだが、そこには『新しい景気循環理論と株価騰落』や『経済学原理 総論及生産論』⁸といった書物がほんの3冊あっただけだった。残りは芸術、心理学の分野で占められていた。医学書や図鑑といった理系の本は高価で、普通の学生では購入しにくかったせいともいえよう。王氏は医学の専門書は人に借りて間に合わせ、兄妹からもらった小遣い銭の大半を文学書の購入にあてた(王・所澤、2012: 58-60)。

カテゴリー1～4は全て人文分野の本で、これで全体の81%を占めている。カテゴリー1と2は哲学、思想、歴史、評論の本で、中でも哲学書が多かった。1では、ドイツ人の著書が最も多い(25冊中10冊)。最多の著者ドイツの社会学者ゲオルク・ジンメル(Georg Simmel, 1858-1918)の本は3冊あった⁹。ジンメルはカール・マルクス、マックス・ウーバー、デュルケームと共に社会学の黎明期を作ったとされる人物である。他の国としてはフランスやイギリス人著者の本の中に、ギリシャに関するものが2冊あった。一つは新プラトン主義哲学者プロクロスの『プロクロス形而上学』で、

⁶ 台北高校はじめ旧制高校では、まず理科と文科にクラスを分け、更に英語を主専攻にしたクラスを理甲、文甲、ドイツ語を主専攻にしたクラスを理乙、文乙とした。王氏のいた理乙クラスは医学部を目指す台湾人学生が多くいた。

⁷ 『自然科学史入門』(フリードリヒ・ダンネマン著・山田坂仁訳・慶應書房・昭和16年発行)、『高山植物分図彙』(武田久吉著・梓書房・昭和8年発行)、『植物形態学汎論』(破損のため不明)。

⁸ 『新しい景気循環理論と株価騰落』(後藤一平著・学芸社発行・昭和11年)、『経済学原理 総論及生産論』(福田徳三著・改造社・昭和3年発行)、『確率論』(末綱怨一著・岩波書店・昭和16年発行)。

⁹ 『芸術の哲学』(藤野渉訳・文進堂・昭和18年発行)、『戦争の哲学』(阿閉吉男訳・鮎書房・昭和18年発行)、『歴史哲学の諸問題』(樺俊雄訳・三笠書房・昭和14年発行)。

もう 1 つは『ギリシャ史』¹⁰である。プロクロスは 2 世紀頃のギリシャ哲学者で、こういった古典を紐解くうちに、ギリシャ史を遡っておこうと思い、ギリシャ史を読んだのかもしれない。

カテゴリー 2 では 43 冊中、西田幾多郎の本が 3 冊¹¹、三木清の本が 3 冊¹²で最多だった。三木は西田の教え子で、共に戦前の高校生に絶大な人気を誇った。三木清を読んでいると言ったら、「読め、高等学校の生徒だろう」と強く勧められたという話が日本に残っているほどである（竹内、2011：261）。他にも、高校生の人気の著者だった倉田百三の『愛と認識との出発』、阿部次郎の『倫理学の根本問題』¹³も、王氏蔵書中にあった。また、台湾に関するものとして台北高校哲学科教師だった高峯一愚の『輓近倫理の諸問題』¹⁴の他、台湾で出版された本が 2 冊あった¹⁵。

カテゴリー 3 と 4 は文学（作家論や文学論も含む）で、外国人著者の文学作品が 252 冊あり、全体の 47%、日本人著者の文学作品が 21%を占める。外国文学については次節で別に述べるとして、日本文学で最も目立つのは中央公論社発行・谷崎潤一郎訳の『源氏物語』が巻一から巻二十六まで、2 冊欠けているもののほぼ全巻揃っている点である。このカテゴリーには他にも全集物が見られた。新潮社発行の『吉田絃二郎全集』で全 18 巻（1931-1934 年）のうち 7 冊あった。また金星堂発行・百田宗治編纂の『現代詩講座』（全 10 巻・1929-1930 年）は第 10 巻まできれいな形で揃っている。またかなり散逸しているのだが、改造社の『現代日本文学全集』もあった。それから注目すべき点として、43 冊の日本人著書の中に、正岡子規、北原白秋などの歌集、句集、詩集が 25 冊もあった。日本の近代詩歌や句に王氏が強い関心を持っていたことを表している。日本人の著者だが外国文学について書かれたものとしては、例えば白水社発行・伊吹武彦著『近代仏蘭西文学の展望』、小山書店発行・小牧健夫著『独逸文学鑑賞』、金星堂発行・町野静雄著『今日のイギリス文学』、そして支那文学に関する書物が 2

¹⁰ 『プロクロス形而上学』（プロクロス著・五十嵐達六郎訳・生活社・昭和 19 年発行）、『ギリシャ史』（ジョン・バグネル・ビューリー著・村田泰志訳・三邦出版社・昭和 18 年発行）。

¹¹ 『続思索と体験』（岩波書店・昭和 12 年発行）、『働くものから見るものへ』（岩波書店・昭和 2 年発行）、『日本文化の問題』（岩波書店・昭和 15 年発行）。

¹² 『哲学入門』（岩波書店・昭和 15 年発行）、『人生論ノート』（創元社・昭和 16 年発行）、『哲学ノート』（河出書房・昭和 16 年発行）。

¹³ 倉田百三『愛と認識との出発』（岩波書店・大正 10 年発行）、阿部次郎『倫理学の根本問題』（岩波書店・大正 5 年発行）。

¹⁴ 高峯一愚『輓近倫理の諸問題』（弘学社・昭和 12 年発行）。

¹⁵ 宮川次郎『福建風土記』（台湾実業社・昭和 15 年）、宮川次郎『趣味の臺灣』（日本旅行協会台湾支部・昭和 16 年発行）。

冊¹⁶あった。

2. 欧米作品の翻訳書が大半

カテゴリー3の外国文学252冊を、著者の国籍別に統計をとってみたところ、以下のような結果となった¹⁷。

表三 外国文学の著者国籍（合計252冊）ベスト5

ランキング・冊数	国名	冊数の多かった作家名（上位から順に）
1位・86冊	フランス	アンドレ・ジイド（17冊） ロジェ・デュガール（7冊） モーパッサン、ルナアル（6冊） ヴァレリー（5冊）
2位・56冊	ロシア	ドストエフスキー、トルストイ（16冊） チェーホフ（6冊） ツルゲーネフ（5冊） ゴーゴリ、ゴーリキー（3冊）
3位・48冊	ドイツ	ゲーテ（9冊） シラー（＝シルレル）（6冊） ヘルマン・ヘッセ（5冊） ハウプトマン（4冊）
4位・17冊	イギリス	サッカレ（5冊） ヴァージニア・ウルフ（2冊）
5位・12冊	オーストリア	シュニッツラー（9冊） リルケ（3冊）

（出典：津田勤子「王萬居先生蔵書書単」）

ちなみに下位としてはアメリカ（10冊）、スペイン（6冊）、ノルウェー（5冊）、ベルギー（4冊）、他にアイルランド、スイス、デンマーク、イタリア、スウェーデン、ジュネーブが各1冊だった。全て欧米に集中し、アジアやアフリカ地域の作家の本は1冊もなかった。ここで、トップ3の国の作家と作品に焦点を絞り、なぜこれらの国

¹⁶ 小林甚之助『文部省検定受験参考支那文学史要』（大同館書店・昭和6年発行）、富樫昌胤『支那文学辞典』（南陽堂・昭和6年発行）。

¹⁷ 国籍不明6冊の他、1冊中に著者が複数いれば一名ずつカウントした。

の作家の本が多いのか、王氏はどういう読み方をしたのか、日本での翻訳文学研究と『杏』誌の作品を元に考察してみたい。

(1) フランス文学

トップのフランス文学の中でも圧倒的に多かったのがアンドレ・ジイドの著書で、合計 17 冊もあった。ジイドの作品は現在でも日本で小説・戯曲 28 冊、エッセイ・評論 7 冊が出版されている（全集は 4 社から出版）が、17 冊所有しているというのは相当多いと言えよう。王氏や杏メンバーがいかに深くジイドに傾倒していたかは、『杏』10 号を読むとわかる。この号の合計 31 作品のうち 9 篇（随筆・評論）が、ジイドの作品（『女の学校』『ロベール』『未完の告白』『背徳者』『田園交響楽』）を主題にした書評や随筆だ。この号では他にポール・ヴァレリー、コクトオやマラルメ、プルースト、ボードレール、モーリヤックについて触れ、彼らがこの時期積極的にフランス文学を閲読していたことが窺える。

フランス文学の何が王氏や杏メンバーの心を捉えたのだろうか？ 赤瀬雅子は、理想的な紳士を創るために明治初期から日本でイギリス文学が大きな役割を果たしたのに対し、フランス文学はイギリス文学の正統性に対するアンティテーズ、陰の部分を持った文学だった、そして反権力志向、自由への憧憬、超時空的世界への飛翔、無政府主義に対する共鳴、享樂的生活への傾斜など、屈折した、雑多なものがフランス文学にはある、と指摘している（赤瀬、1984）。ジイド作品に多く触れている『杏』10 号は 1946 年 10 月発行で、この時期は正に台湾人が祖国復帰の興奮が冷め、社会の激変ぶりにとまどっていた時である。王氏の所有するジイドの書にはソビエトを批判する『ソヴィエト紀行』や、植民地の在りかたに疑問を投げかけている『コンゴ紀行』もあった。人や社会を多元的に観察する視点や権力への冷静なフランス人作家の態度が、台湾社会の新しい変化に適応しようと努力中だった王氏らを惹きつけたのかもしれない。

(2) ロシア文学

2 位のロシア文学中最も多かった作家、トルストイとドストエフスキーについては、王氏は全集物で多く所有している（トルストイは『大トルストイ全集』三笠書房・原久一郎訳、昭和 11～14 年発行。ドストエフスキーは『ドストイェフスキイ全集』三省堂・中山省三郎訳、大正 14 年～昭和 12 年発行）。トルストイは個人と社会との関わり方・生き方を提示し、ドストエフスキーは個人と社会の関係を内面化・深化させるところに作用した作家だと言われている（国松、1984）。個人と社会の関係を描いたこう

したロシア文学から、王氏は何を感じ取ったのだろうか？『杏』11号（1948年2月発行）で、王氏はゴーゴリの「検察官」を読んだ感想をこう書いている。「歴史は踏襲するというが、例えば現今の我が国の社会状態が十九世紀のロシアの社会状態に非常に似ていることがそれである。ロシアのその時代の社会と作品とを連繫して調べる時、我々は我々の現今の社会が暴露され、批判されているような気がして、一種のアイロニーと憂鬱とを実感するのである」（王、1948：45-51）。「検察官」のどんな内容を指して、王氏は自分の国の社会状況と似ていると感じたのだろうか？「検察官」は都会的なだけが取り柄の貧しい若者が、ふとしたことで検察官だと誤解され、旅先の町の人々から歓待を受け、お金まで巻き上げるという喜劇タッチの戯曲である。ロシア文学の魅力は、そのリアリズムだと言われる。人間に対するリアリズム、人間と自然、個人と社会に対するリアリズムが克明に描かれ、読者はそこから人生観や世界観を形成しようとする。この文章を『杏』に発表した1948年、台湾社会では二二八事件を経て国民党政府が力づくの圧政を本省人に施し、特に王氏たち日本語で教育を受けて来たエリートは、「国語」が北京語に転換したことで沈黙を強いられ始めた時期である¹⁸。彼の眼には、「検察官」に出て来る権力をかさに他人を利用しようとする人間、権力に弱い人間が、皮肉にも自分達の現実社会にもいることを苦々しくも発見し、ロシア文学にそれを重ね合わせたのだろう。

（3）ドイツ文学

旧制高校生、特に王氏のような理乙（ドイツ語が主専攻）の学生といえば、ドイツ語を週に9～11時間学習させられ、辞書さえあれば原文を日本語に訳せる程ドイツ語が身近にあった。実際、『杏』の従属雑誌『罌粟』（翻訳専門誌）では、戦前人気だったハンス・カロッサの『戦争日記』などの日本語訳を試みたメンバーがいる。王氏の蔵書で最も多かったのはゲーテだが、戦後生まれの筆者でも知っている『若きウエルテルの悩み』や『詩と真実』『ファウスト』といった本が蔵書の中にあった。シラーでは『オルレアンの乙女』『ウイリアム・テル』、ヘルマン・ヘッセでは『風物帖』、ハウプトマン『日の出前』、トーマス・マン『ロッテ帰りぬ』『混乱と若き悩み』、他にもドイツ文学といえば誰でも思い浮かぶランケやハイネ、ニーチェの書物があつた。

旧制高校の特性や戦前教養主義を研究する村上陽一郎は、大正から昭和にかけて日本全国の高校で展開された教養主義は日本のものより欧米のもの、中でもドイツのも

¹⁸ 台湾大学の授業で日本語使用が正式に禁止になったのは、1950年9月からだとされる。台湾大学檔案館典藏檔案、公文字號、三十八亥梗校祕字第8796號：「通知自卅九學年度起停止用日語教課」、1949年12月23日。

のが幅をきかせていたことを指摘。高校生が使うさまざまな隠語（女性を「メツチェン」、愛を「リーベ」とドイツ語で言ったり）をはじめ、音楽も読書もドイツのものが英語やフランス語をしのいで人気で、特にドイツの哲学が最も中枢を占めていた（村上、2009：136-171）。『杏』誌を見ると、他の国の文学が比較的に戦後以降の発行誌からよく引用されているのに対し、ゲーテやシラー等ドイツ文学は戦前からよく引用されている。例えばゲーテの作品はどれも難解だと言われているが、『『ゲーテ対話抄』が大部私のものとなったらしい。理解すると言ふ事の偉大な嬉しさにこの頃は朗らかだ』という『杏』3号（1943年9月発行）中の会員の文章が示すように、難解で深淵なドイツ人の作品を少しずつ自分の物にしていくことが、学生にとっては喜びであったことがわかる。ドイツの哲学や文学、文化には高校生を惹きつける魅力が多分にあったことが推測できる。

また忘れてはならないのが、これら外国文学が日本語の翻訳を通して読まれている点である。例えば堀口大学や森鷗外等は卓越した翻訳を残したと言われているが、この翻訳文の妙を味わう楽しみも、王氏たちを魅了したのではないだろうか。

3. 岩波書店が全体の2割以上

さて、ここで536冊の出版社を統計してみたところ、以下のような結果になった。

表四 536冊中最も多かった出版社トップ5

ランキング・冊数（536冊中）	出版社名	割合
1位・138冊	岩波書店	26%
2位・48冊	新潮社	9%
3位・35冊	白水社	7%
4位・31冊	中央公論社	6%
5位・17冊	第一書房	3%

（出典：津田勤子「王萬居先生蔵書書単」）

岩波書店の本が最も多く（138冊、26%）、特に岩波文庫が112冊もあった。竹内洋は著書の中で、岩波茂雄が創設した岩波書店について多くの紙幅を割き、戦前の学歴エリートの教養主義と岩波文庫文化の密接なつながりを論じている。岩波茂雄は一高時代の人脈を生かし夏目漱石の一連の作品を出版できたことで岩波書店の名を高め、やがて欧米の哲学書を翻訳する本を多く提供していくようになる。最盛期では1921

年に翻訳書が岩波書店の刊行物全体の45%を占める程であった(竹内、2011:132-167; 村上・竹内解説、2013)。また円本ブームに呼応し、人文科学の古典を中心に手軽な値段で読者に提供したのが岩波文庫で、これはドイツのレクラム文庫を模倣して生まれたと言われている。星印一つで20銭で、1冊20〜60銭で買えた(南博・社会心理研究所、1987:298)。

王氏の蔵書を再び見るとカテゴリー1には、岩波書店の本が3冊あった¹⁹。カテゴリー2(43冊中、岩波書店の本は14冊)では、先ほど紹介した倉田百三や三木清の著書の他、『哲学概論』(宮本和吉著)、『倫理学の根本問題』(阿部次郎著)、『論理学』(速水滉著)等、岩波書店を「哲学の岩波」と言わしめた哲学叢書(計12冊出たシリーズ)も含まれていた。²⁰

カテゴリー3には最も多くの岩波文庫があった(252冊中81冊)。ゲーテ、シュニッツラー、チャーホフ、ゴーゴリ、ドストエフスキー、プーシキン、ツルゲーネフ、トルストイ、オリガメチニコフ、アンドレ・ジイド、ゴールズワージー、ルナアル、ハウプトマン、ランケ、バルザック、ミュッセ、ジョルジュサンド、モーパッサン、シュトルム、ヘルマン・ヘッセ、シルレル、ジンメル、イプセン、サッカレ……といった作家の作品で占められていた。岩波書店が文庫という手軽な媒体で、外国の優れた作品を日本や植民地に広めていったことが、ここから読み取れる。

4. 台北や内地の書店で入手した記録あり

これだけ多くの日本語の書物を、王氏はどこで入手したのだろうか。引き揚げる日本人から買ったりもらったりしたのだろうか?王氏の記憶では日本人から入手したといえば、台北高校の恩師・福山先生²¹からもらった本が何冊かあるだけで、あとは自分で購入したが、何という店で購入したかは覚えてないということだ。そこで、筆者は蔵書の裏表紙の内側に貼ってある書店名や所在地が印刷されたシールやスタンプ、王氏が記入したと思われる手書きメモの内容を転記した。

¹⁹ 『人種の問題』(Jハックスリ・Aハッドン・小泉丹訳・昭和15年発行)、『歴史と自然科学 道徳の原理に就て 聖「ブレルーディエン」より』(ヴィンデルバント著・篠田英雄訳・昭和4年発行)、『歴史とは何ぞや』(ベルンハイム著・坂口昂・小野鉄二訳・昭和10年発行)。

²⁰ 宮本和吉『哲学概論』(大正2年発行)、阿部次郎『倫理学の根本問題』(大正5年発行)、速水滉『論理学』(大正5年発行)。

²¹ 福山伯明:台北高校博物・生物教授。

表五 本の裏表紙内側に貼られていたシール及びスタンプ

シール	スタンプ
台北市児玉町鴻儒堂 大阪梅田阪急百貨店書籍部 階上喫茶店南天堂書房東京本郷 旭堂書店 台北市児玉町 本郷三田慶應書房 台北・太平町 文友堂書店 FUJI SHOBO EBISU TOKYO 台北表町太陽堂書店 台北市太平町日光堂 東京神田大成堂書店	台北高等学校尋常科学友会文庫部 長尾蔵書 双葉書店貸本部 博文堂書店貸本部 級 号 貸本三級宮本書店 学文堂貸本一級 貸本用 級 号大陸書店 旭堂貸本 級 西河書店貸本部第 級 蓬萊公学校児童文庫 新開自助 秋屋蔵書 「住吉」「河島」「中村」「王万居」等個人印

(出典：津田勤子「王萬居先生蔵書書単」)

台北市内の書店の他、東京や大阪の書店シール、個人名や学校団体名のスタンプが見つかった。その一方、手書きの覚え書きも多数あった。王萬居氏の名前が入った「Mankyo Ou 1946.5.3 Taihoku」「王萬居」といったメモの他に、「三省堂ニテ」「京都朝日會館」「恩師福山伯明先生ヨリ」「民国 35 年 1 月、町のある大学生より」「昭和 12 年 5 月京都河原町書籍會館ニ於テ購入ス」「17. 10. 14 日光堂ニテ」「昭和 18 年 2 月於松山陸軍病院購入」「19. 9. 15 東陽堂」「19. 8. 12 文明堂ニテ」「昭和 17 年 7 月 17 日栄町三省堂にて隆」「昭和四年十二月六日於太陽堂高橋博」「15. 12. 25. 台北蚤ノ市²²ニテ」「大分県宇佐郡」等であった。シール、スタンプ、手書きメモのどれにしても、日本の書店名が多くあるが、これらは台湾の古書店へ流れたものかもしれない。

戦前の台北には、日本人が開いた日本語書籍を置いた新書店・古書店が多数あり、内地で過剰に出版された雑誌や書籍が台湾の市場でさばかれていた。例えば台北高校にも近い児玉町付近には鴻儒堂、台北堂、野田書店、厚文堂、城内へ行けば、新高堂、

²² 沖田信悦（2007：42-58）によると、古本業者が台北古書籍商組合を組織し、台北書物同好会と共同主催で、台湾日日新報社楼上で、1938 年 10 月の第一回から年に二回「書物蚤の市」を開催したとある。王氏の書き込み、1940 年 12 月 25 日は第五回の初日である。尚、台北書物同好会は 1933 年に雑誌「愛書」を創刊した愛書会が母体であり、発起人には愛書会同様、台北帝大の関係者が多く並ぶ。愛書会についての研究は李品寛（2009）に詳しい。

太陽號書店、丸善支店、古本屋の次高堂、杉田書店、万華の方角へ向かうと、東陽堂、平光書店、日台堂書店、啓文堂、至誠堂、南進堂、岐阜屋書店、鹿子島書店、高砂書店、福文堂があった。鉄道の線路を超えて北へ向くと、日文堂書店、志堂書店、富士書店、日光堂があった（沖田、2007：48）。戦後にも、牯嶺街一帯に古書店があったと言われている（馬、2003：136）。

王氏が蔵書に残っているスタンプやシールのとおりの店で購入したのか、或いは上記のような古本書店等で後に購入したのか、今では特定が難しい。しかし、日本で出版された本が台湾の王氏の手元に渡るまでの経緯を示す、一つの証拠としてこれらの記録は価値がある、と筆者は考える。

5. 戦後も旺盛だった読書欲

台北高校入学後、読書に目覚め、1945年10月に高校を繰り上げ卒業後、翌年9月に台湾大学に入るまでの約1年間、多くの時間があり、読書や「杏」の活動を活発にしていた、と王氏は振り返っているが、蔵書の中にある購入日或いは読了日らしい日付の書き込みを見ると、確かに昭和19年から民国35年の3年間に集中している。以下、蔵書の中の日付に関する書き込みがあった計83冊について、書き込みとして最も多かった年数順に並べてみた。

表六 日付の書き込み統計

年数	冊数（計83冊）
1946年（民国35年）	27冊
1945年（民国34年）	13冊
1944年（昭和19年）	11冊
1943年（昭和18年）	9冊
1942年（昭和17年）	5冊
1937年（昭和12年）	4冊
1939年（昭和14年）、1948年（民国37年）	各3冊
1940年（昭和15年）、1947年（民国36年）	各2冊
1938年（昭和13年）、1936年（昭和11年）、 1929年（昭和4年）、1941年（昭和16年）	各1冊

（出典：津田勤子「王萬居先生蔵書書単」）

王氏が高校に入る前の昭和 18 年以前の日付があるが、これはひょっとしたら王氏が古本屋で購入した本で、前の持主が書き込んだ日付かもしれない。王氏は兄弟や先輩から本をもらった記憶はない、と言うので古本屋で購入した可能性が高い。

また、日付だけでなく、少数だが購入時のシチュエーションを書き添えた覚え書きがあった。例えば、「復活祭前日周ト散歩ガテラ求ム。一九四六、四、二十 Taihoku」²³、「34. 11. 17 杏ノレコードコンサートノアリシ日ニ」²⁴、「民国 34 年 12 月 27 日試験ノ終リシ日ニ」²⁵、「Friday meeting 1946.9.27」²⁶、「34. 11. 20 王源ト町ヲサマヨフテ」²⁷、「三六、三、六。二八事件ノ後ノ本」²⁸、「一九四八年四月八日薬理の時間に讀む」²⁹——。これらの書き込みから、王氏がこの期間、いかに本と付き合ってきたかを垣間見られる。Friday meeting とは毎週金曜日に行われていた杏の読書会のことで、杏レコードコンサートとはメンバーの自宅でレコードを共に鑑賞した杏の活動の一環である。仲間との熱い議論に興奮冷めやらぬ彼が、その帰りに本を購入（或いは閲読）したことが想像できる。王源とは二中、台北高校で王氏と同学だった人物で、彼等は学徒兵として樹林口と汐止で重機中隊で生活していた合間に手帳やノート、紙片に書いた随筆や詩・和歌・俳句をまとめ、終戦の一か月前に「*Dammerung*」（ドイツ語で「黎明」を意味する）という文集を出した。これは後の 1998 年に日本人の同級生の協力のもと、復刻版も出ている³⁰。共に文学が好きな王源氏と街歩きし、興に乗じて本を購入した様子が目に浮かぶ。また、二二八事件の数日後にはシルレルの本を買って（或いは読んで）いるが、ドイツ文学は彼のどんな感情を刺激したのだろう。少しではあるが、こうしたメモから動乱の台湾社会の中で王氏が好きな本の世界に身を委ね、さまざまな思いを巡らせていたことが想像できる。

三、読書の「型」を形成する装置——高等学校

ここまで王氏の蔵書調査結果から、彼がどのようなジャンル、出版社の本をよく読み、それをいつ、どこで購読したかを分析した。ここからは、王氏を含めた日治末期

²³ この書き込みは、米川正夫訳・第一書房発行『世界文豪読本トルストイ篇』の本の中にあった。以下も同様。

²⁴ アンドレジッド著・河上徹太郎訳・岩波書店発行『鎖を離れたプロメテ』。

²⁵ アンドレジッド著・小林秀雄訳・岩波書店発行『パリュウド』

²⁶ エティエンヌ・ジルソン著・佐藤輝夫訳・白水社発行『中世ヒューマニズムと文芸復興』。

²⁷ アラン著・小西茂也訳・白水社発行『情念について』。

²⁸ シルレル著・秦豊吉訳・新潮社発行『ウィルヘルム・テル』。

²⁹ 武者小路実篤著・岩波書店発行『友情』。

³⁰ 台北高校二理乙同窓会『*Dammerung* 復刻版』1998 年、山田新一発行。

エリート青年が、戦前そして戦後を通して続けた読書生活の基本的スタイル（何を読むか、どう読むか）＝読書の「型」が高等学校で育まれたという観点から論述を展開していきたい。

永嶺重敏は、高等学校においては明治後期以降、もっぱら内外の古典的文献を中心とする教養主義的読書が盛んに行なわれ、幅広く豊かな読書生活が展開されていたが、大学に入ると今度は一転して無味乾燥な専門知識の習得に追われる、東大の卒業生の回想でも、読書の思い出は圧倒的に高校時代に集中しており、大学時代の読書については殆ど書かれていないケースが多い、と読書生活における旧制高校と大学の差異を指摘している（永嶺、2007：52）。確かに王氏にしても、読書に目覚めた高校時代、授業に出るより図書室にいる時間のほうが長かった位、よく本を読んだと述懐している。前節で王氏が戦後も旺盛に読書生活を送った可能性を指摘したが、台湾大学で医学の専門教育を受けつつ、動乱の台湾社会の中で青年医師として成長する上で、精神の糧、人格陶冶の手段として台北高校で培った読書のスタイルを実践し続けた、と筆者は分析する。李登輝等、他の卒業生らも自らの読書経験を語る際、大学時代よりずっと多く高校時代のことを引き合いに出して語っている。

では高等学校には、学生の読書欲を刺激するどのような装置があり、学生らが読書生活の基本的スタイル＝「型」を形成する役割を果たしたのだろうか？ 教師、先輩・同級生、校内刊行物の3つの側面から考えていく。

（一） 教師

卒業生の座談会記録を見ると、「島田謹二先生が中心になって西洋文化研究会というのがあった。僕は理科だが、あれが一番楽しかった」という口述があった（蕉葉会³¹、1970：104）。徐聖凱によると、台北高校では1930年代後半から各種定期・不定期な講演会や特定の主題による研究会などが盛んに行なわれた。例えば文化講演会、西田哲学批評会、西洋史研究会、数学研究会、万葉集講読会、即興詩人講読会、西洋文化研究会等である。これらは主に教師による自発的な会で、普通は週末の午後に行われ、台北高校教師が講義をする他、台北帝大などの教師を招くこともあった。教育年限が短縮される1942年が最も盛んで、戦時の教育環境の不足を補っていた。「西洋文化研究会」とは西洋文化や文学を対象とし、1941年から始まったもので、A班はドイツ語教授市瀬斎が担当しドイツ文化を中心に、B班は英語教授島田謹二が担当し、西洋文

³¹ 蕉葉会は台北高校卒業生の組織で、戦後東京大学に進学した卒業生らにより設立。例会を開く他、記念誌発行の活動等もしている。

化や文学を幅広く対象にしていた（徐、2012：173）。そこでは、ダンテの「神曲」やニーチェ、プラトン、カントといった西洋古典作品をいかに読むべきかという、いわば読書の方法が教授され、また「西洋文学文化必読書」と称した推薦書籍のリストまで配布された（山口房雄、2003）。

こうした公的な課外活動の他、卒業生の回顧録を見ると、当時は学生が個人的に休日等に教師の自宅を訪ね、教師の所有する大量の書物を手に取ったり借りて帰ったり、その本の内容を教師と共に忌憚なく議論することもよくあったことがわかった。日本内地で教育を受けた日本人教師が台北高校に赴任し、自分が日本の学校で身につけた読書方法、本に関する知識を、台湾で学生らに公私にわたり手とり足とり伝授したことが窺われる。

（二）先輩・同級生

教師の指導やアドバイス以外に、部活動や学生寮の先輩からも読書の手ほどきがあったことも考えられる。例えば卒業生のこんな回想があった。「移川さんは、とにかく無茶苦茶に本を読めといった。高校三年の読書量が、きっと君たちを大にするともあった」そして「読むぞ！読むぞ！かたっぱしから読んでいくぞ！」と決意した、「日野原さんから太宰治の作品を読むようにすすめられていた」（蕉葉会、1970：162-165）。これらの記述から、先輩からの力強い読書指南があったことがわかる。

また旧制高校では、「一年生で和書、二年生で翻訳書、三年生で原書を読むべき」といった言説が先輩から継承されていたともいう。いつ何を読むか？といった情報は、例えば当時高校生達が愛読していたという『改造』『中央公論』『文藝春秋』等の総合雑誌や、河合栄治郎の『学生叢書』シリーズ³²等から得た可能性も高い。しかし、ストームや寮生活、部活動等高校生活に欠かせない学校体験を通して、上の学年から下の学年に指南されたこともきっと多かったはずである。

また、台北高校卒業生の回顧録によると、同級生同士の読書会や輪読会を盛んに開いていたことがわかる。例えば 19 理乙の陳炯宗は「台高最終年の夏休み木代君と二人でファウストを読んだ」、12 文乙小川進は「高校生活の中心は寮生活と運動と読書であり」、「ヘーゲル、ランケ、西田幾多郎、河合栄治郎、安倍能成、和辻哲郎、阿部次

³² マルクス主義の弾圧の後、教養主義が息を吹き返し、昭和 11 年から 16 年にかけて河合栄治郎を編者として全 12 冊の『学生叢書』が刊行される。例えば『学生と教養』『学生と読書』等で、竹内洋はこれらは昭和の教養主義のバイブルであったと指摘（竹内、2011：259-260）。

郎、芥川龍之介、横光利一を繙読し」たことを述べている。また17甲の山村穰は友人4人でシュベグラーの『西洋哲学史』（上・下）を輪読会を開き読解し、17文乙の山口は哲学書や倫理学の書を仲間同士で議論し、当時の高校生はよく難しいことを口にした、と振り返っている（山口房雄、2003）。友との議論の中で次に読むべき本を知ったり、読んでみて難解だった内容を互いに解き明かしたりすることで、自分の体内に深く本の内容を吸収させていったのだろう。王氏の所属していた杏会の「金曜会」と名付けた読書会では、自分が読んだ本について読後感を語ったり、読むべき本を発表しあったりした。その議論の内容は会誌『杏』にも反映され、書評や書物を引用した文章が、創作作品以外に多いのが目立つ。

（三） 校内刊行物

また学校のハード資源としては図書館がある。そこには日本内地と何日の差もなく最新の雑誌や書籍が並べられ、授業に出ず図書館に籠る学生もいた程充実していた³³。更に、台北高校には新聞部発行の『臺高』（1937年2月～1940年12月、全18号）というパブリックな刊行物があった。内容は校内情報を柱にして、論文や研究報告、海外情報等多岐にわたっている。文芸誌と称していた文芸部発行の『翔風』程ではないにしても、創作、随想、詩、短歌、俳句といった文芸作品の掲載もあり、生徒はもちろん教師陣も多く寄稿した（河原、2012：4-5）。また、「日本の独逸文学界消息」や「胡適から魯迅まで」、「古本屋の利用」、「読書に関して」、「夏季休暇推薦図書」、「最近如何なる本が多く読まれたか」、「読書往来」、「読書の頁」、「読書随想」などの読書指南の記事が相当盛り込まれている。読書に関する情報というと、他にも最終号に、「読書傾向調査」の結果発表を掲載している。全校生徒のうち251名を対象に（全体の約5分の3）「最近読んだ書物」「特に感銘した書物」「特に注意を払ふ著者名」「購読新聞、雑誌名」「一箇月の書籍代」「崇拜する人物名」という六項目で調査した結果である。また、『臺高』は書店の広告も多くスペースをとっており³⁴、当時の学生がこれらの媒体から多かれ少なかれ書籍選択の基準や内容に関する情報を得ていたことが想像できる。

³³ 台北高校図書館の蔵書の詳細については、国立臺灣師範大学図書館編『国立臺灣師範大学館蔵臺北高等学校図書目録』（台北：2012年）が参考になる。

³⁴ 『臺高』（創刊号～18号）中に見られた書店の広告は、児玉町野田書房、栄町新高堂、栄町杉田書店、栄町文明堂書店、児玉町三弘堂書店、新起町学文堂書店、東門町日の出書店である。

四、 終りに

以上、王氏の蔵書をモデルケースに、日治末期エリート台湾青年の読書生活を考察した結果、そこからまず浮かび上がったのは同時期に日本で高校教育を受けた人々との同質性である。今回、戦前エリートの読書生活を研究するにあたり、日本内地での高校生・大学生がどのような本を読んできたか、多くの資料に触れた³⁵。そこで見られる人気の著書や著者が、王氏の蔵書リストに見られる内容と非常に類似していることがわかった。旧制高校文化を象徴する「デカンショー節」という言葉が示すように、デカルト、カント、ショーペンハウエルが代表する西洋の哲学書、日本の哲学者では西田幾多郎、三木清、文学ではリアリズムを追求したロシア文学、反権力のフランス文学、人間の真理を問うドイツ文学等欧米作家の作品が愛読された。ストームや記念祭、バンカラといった内地の旧制高校文化が台北高校にも入ってきたように、読書の「型」も日本内地から来た教師や高校という装置を通して移植されたのではないだろうか。

こうして日本内地との同質性、「知」の移植に気付いたその一方で、筆者は台湾の特異性も発見した。日本時代においてはエリートといえども台湾人は被統治側の人間であり、青年らは民族としての誇りを自覚しつつ、台湾人の不幸な境遇に心を痛めた。戦後においては、祖国復帰への喜びもつかの間、国民党の執政がもたらした社会の激変、「国語」の転換等に必死の思いで適応しようとした。こうした厳しい現実、ぬぐいきれない多くの社会矛盾に立ち向かう上で、エリート達にとって読書で得た「知」は時に武器となり、時に生きて行くための知恵やヒントになったのではないだろうか。哲学書や東西の古典への傾倒は、変貌めざましい社会において常に「真理」を追求しようとした彼等の生き方を象徴するものともいえる。白色テロの犠牲になった葉盛吉は、日本の二高を卒業し、終戦後、台湾大学医学部に編入した。そこでいくつかの読書会や文芸同人誌の活動に参加していたという（楊、1993：222）。異民族による植民統治からようやく離脱した台湾の為に、新しい国家建設の為に自分の持てる力を発揮したいと願ったエリート青年達にとって読書や知識がどんな意義を持っていたのか、これからも時間をかけて考えていきたい。

³⁵ 例えば『旧制高等学校全書 第七巻 生活・教養編（2）』では、いくつかの高校の人気図書や推薦図書のリストを紹介している。

引用文献

一、日本語文献

- 赤瀬雅子, 1984, 「日本におけるフランス文学の影響」, 佐藤孝己・富田仁編, 『日本近代文学と西洋』, 東京: 駿河台出版社。
- 王萬居, 1948, 「読書ノートより」, 杏会, 『杏』, 第 11 号, 未出版, 45-51 頁。
- 王萬居, 2011, 『つれづれ憶うにある台湾人医師の随筆・句集』, 台北: 石原印刷出版社。
- 王萬居 (話し手)、所澤潤 (聴き手), 2012, 『台湾口述歴史研究第 5 集王萬居オーラルヒストリー』, 東京: 東京女子大学栗原研究室。
- 沖田信悦, 2007, 『植民地時代の古本屋たち 樺太・朝鮮・台湾・中華民国——空白の庶民史』, 札幌: 寿郎社。
- 河原功, 2012, 「臺高解題・総目次」, 台北高等学校新聞部, 『臺高 創刊号—第 18 号』, 台北: 南天書局, 3-48 頁。
- 国松夏紀, 1984, 「日本におけるロシア文学の影響」, 佐藤孝己・富田仁編, 『日本近代文学と西洋』, 東京: 駿河台出版社。
- 旧制高等学校資料保存会, 1984, 『旧制高等学校全書第七巻 生活・教養編 (2)』, 東京: 丸善。
- 蔡錦堂, 2011, 「一九四〇年代雑誌『杏』と「杏」読書会のエリートたち」, 檜山幸夫編集, 『帝国日本の展開と台湾』, 東京: 創泉堂出版, 491-519 頁。
- 蕉葉会, 1970, 『台北高等学校 (一九二二—一九四六)』, 東京: 蕉葉会。
- 竹内洋, 2011, 『学歴貴族の栄光と挫折』, 東京: 講談社。
- 永嶺重敏, 2007, 『東大生はどんな本を読んできたか本郷・駒場の読書生活 130 年』, 東京: 平凡社。
- 南博・社会心理研究所, 1987, 『昭和文庫』, 東京: 勁草書房。
- 村上一郎・竹内洋解説, 2013, 『岩波茂雄と出版文化 近代日本の教養主義』, 東京: 講談社。
- 村上陽一郎, 2009, 『あらためて教養とは』, 東京: 新潮社。
- 山口房雄, 2003, 『獅子頭山讃歌 自治と自由の鐘が鳴る 旧制臺北高等学校創立八十年記念文集』, 東京: 旧制臺北高等学校記念文集刊行委員会。
- 山口守編, 2003, 『講座台湾文学』, 東京: 国書刊行会。

楊威理，1993，『ある台湾知識人の悲劇 中国と日本のはざまで葉盛吉伝』，東京：岩波書店。

二、中国語文献

- 王惠珍，2010，「戦前台湾知識份子閱讀私史 以台湾日語作家為中心」，『台灣文學學報』第16期，33-52頁。
- 阮斐娜，2010，『帝國的太陽下：日本的台灣及南方殖民地文學』，台北：麥田。
- 李品寬，2009，「日治時期『臺灣愛書會』之研究」，『台灣文獻季刊』，203-234頁。
- 李登輝，1999，『台灣的主張』，台北：遠流。
- 吳密察監修，2000，『台灣史小事典』，台北：遠流。
- 周婉窋，2003，『海行兮的年代——日本殖民統治末期臺灣史論集』，台北：允晨文化事業。
- 莊勝全，2011，「腹有詩書氣自華？：黃旺成公學校教師時期的閱讀生活」，收錄於川島真、陳翠蓮主編，『跨域青年學者台灣史研究第四集』，台北：國立政治大學台灣史研究所，269-302頁。
- 高明士主編，2009，『臺灣史』，台北：五南圖書。
- 徐聖凱，2012，『日治時期臺北高等学校與菁英養成』，台北：國立臺灣師範大學出版中心。
- 馬漢寶，2003，「從早年的台大法律系說起：個人回憶點滴」，收錄於陳奇祿等，『從帝大到臺大』，台北：國立臺灣大學，135-148頁。
- 黃信喜，2012，「訪談三峽醫界耆老王萬居醫師——老驥伏櫪 志在千里 烈士暮年壯心不已——」，『新北市醫誌』，第14期，36-39頁。
- 葉石濤，2008，『葉石濤全集 7 隨筆卷二』，高雄：高雄市政府文化局、台南：國立台灣文學館。
- 鍾肇政，1998，『鍾肇政回憶錄（一）』，台北：前衛。

The Reading Life of Young Elites during the Late Japanese Ruled Period in Taiwan: The Example of Mr. Wang Wan-ju's Book Collection

Tsuda, Isoko

**Ph.D. Candidate, Department of Taiwan Culture, Languages and Literature,
National Taiwan Normal University**

Abstract

This essay examines Mr. Wang Wan-ju's book collection, analyzing the reading life of young Taiwanese elites during the late Japanese ruled period. Born in 1925 in Taipei city, Mr. Wang is now a doctor of 90. After graduating from Taihoku Second Junior School in 1944, he enrolled in the advanced course of Taihoku High School for the second group of the science class, which, however, was terminated earlier in October 1945 due to the end of World War II. After the war, he got further education in the College of Medicine at Taiwan University from 1946 to 1950. He has practiced his medical career in San-xia area since 1957. As a Japanese colony, Taiwan was once involved in World War II. Afterwards, there were even dramatic changes both in politics and languages toward Taiwanese people when Taiwan was ceded to the R.O.C. It was during this turbulent period that Mr. Wang received his education.

The first part of this essay focuses on Mr. Wang's collection of books, 536 of which were in Japanese and were published in Japan before the war. After an analysis of these books, including the titles, the authors, the publishing dates and the prices, as well as the notes left by Mr. Wang, the following features are found: 1) a great deal of the books belonging to humanities; 2) a majority of the books being translated from European and American works; 3) over 20% of the books being published by Iwanami Books; 4) the books possibly being purchased in Taipei or Japan; 5) Mr. Wang's keeping great desire for reading even after the war.

The second part is based on the memoirs of Taihoku High School graduates, describing how the reading styles of the young elites were built. With the above discussions, this essay attempts to get a glance at the daily life and cultural history of Taiwanese people during Japanese ruled period.

Keywords: elite, Taihoku High School, Wang Wan-ju, reading, Kyoyo-shugi